

静岡県日中友好協議会

No.120

2020.10

NEWS LETTER



視窓

新しさと伝統が融合 / 寧波博物館

斬新な様相が目に映る、この建築物は2008年12月に開館した『寧波博物館』です。2012年、建築界のノーベル賞「プリツカー賞」を中国人として初受賞した建築設計師・王澍氏が設計し、「新郷土主義」スタイルの代表作とされるモダンな建物として高い評価がされています。総建築面積は30,000平方㍍、重厚でボリューム感のある絶妙に傾いた外壁ラインと、交差した空間構成となっている一方で、正面の壁には100万枚を超える中国江南地方の古民家の外壁レンガ（明・清代に製作）やタイル等を再利用し、新しさと伝統を融合させた現代建築となっています。

『寧波博物館』は、河姆渡文化から近代以来の貴重な青銅器、磁器、竹刻、玉器、書画、金銀器、民俗などの文化財6万点が展示し、遣唐使や求法の僧侶、元寇や倭寇、勘合貿易から水戸学に影響を与えた朱舜水に関する展示などもあり、港町・寧波と日本との歴史的に深いゆかりがあることを知ることができます。

特集 県内の外国人財の今 製造業労力に寄与

2019年12月15日現在、静岡県内の在留資格を持つ外国人数10万148人（総数293万3137人、全体の3.4%）。国籍・地域別にみると、最も多いのはブラジル31,387人、次にフィリピン17,604人、中国12,279人、ベトナム12,187人が上位を占めています。＊法務省公表

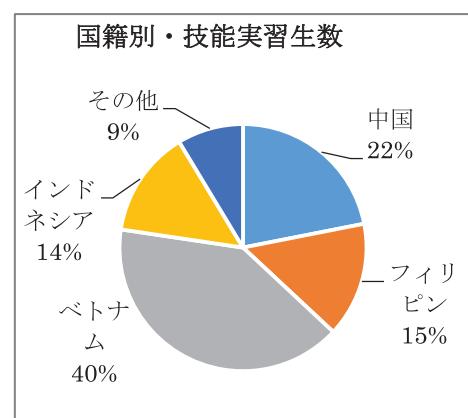
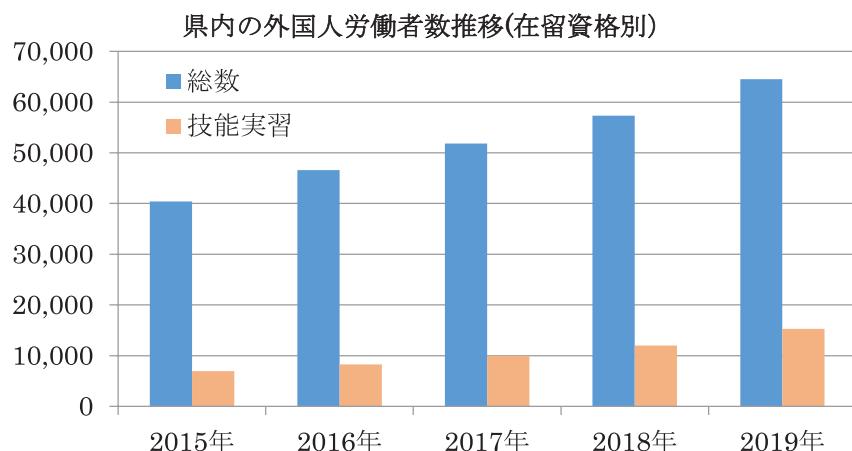
2019年10月末現在、外国人労働者数は64,547人（前年同期比12.5%増）、そのうち「技能実習」資格者数は15,308人（前年同期比27.7%増、全体の23.7%）。7年連続の増加、静岡県は東京都・愛知県・大阪府・神奈川県・埼玉県に次いで6位。＊静岡労働局公表

在留資格 法務省公表の県内にいる外国人の在留資格別でみると、「技能実習」資格者数15,943人（国内総数41万972人、全体の3.9%）が最も多く、次いで「留学」4,196人、「技能」720人などとなっています。静岡労働局公表の「技能実習」資格者数の国別でみると、ベトナム6,184人が最も多く、次いで中国3,353人、フィリピン2,304人、この3か国で約77%を占めます。

増減推移 5年前の2015年比では、外国人労働者数の増減推移をみると、ベトナムが急速に増え400%増（2,386人⇒9,667人）、中国18.4%増（6,524人⇒7,627人）、フィリピン65.8%増（7,425人⇒12,311人）になりました。全体では、5年連続で増え、約60%増（40,376人⇒64,547人）、そのうち「技能実習」も5年連続で増え、約220%増（6,924人⇒15,308人）、全体比では6.8ポイント増（17.1%⇒23.7%）になりました。

就労実態 産業別の割合でみると、「製造業」（27,998人、そのうち食料品4,456人、輸送用機器11,017人、電気機械2,694人、金属製品1,862人）が43.4%を占め、次いで「サービス業」27.4%、「卸売・小売業」6.3%、「宿泊業、飲食業」5.7%となっています。

増加要因 政府が推進している高度外国人材や留学生の受入が進んでいること、雇用情勢の改善が進み、「永住者」や「日本人配偶者」などの資格身分での就労が進んでいること、技能実習生の受入が進んでいることなどがあげられます。



「第28回外国人技能実習生・研修生日本語作文コンクール」

技能実習生・肖麗さん 『走り続ける』 優良賞受賞



〈職場での 肖麗さん〉

日本に在留する外国人技能実習生又は研修生を対象に、日本語能力向上を支援するため、毎年「外国人技能実習生・研修生日本語作文コンクール」（主催：財団法人国際研修協力機構（JITCO））が行われています。

本コンクールには、技能実習・研修生活などを題材とする、意欲にあふれた作品が数多く寄せられ、今年のコンクールに応募した、本協議会の関連団体・静岡県日中経済協同組合が監理団体、(株)カヤ精密工業受入企業の外国人技能実習生・肖麗さんの作文『走り続ける』が、優良賞を受賞しました。

肖麗さんは5年前の2015年に、友達に誘われ、遊びのつもりでランニングを始め、このことをモチーフに作文を書きました。

【受賞作文『走り続ける』の内容要旨】

『最初は、1キロ走るのも大変でしたが、最初はゆっくり走り、毎日少しづつ練習して、今では、10キロを1時間2分で走ることができるようになりました。

日本に来てからも、休日の朝は雨の日以外、休むことなく走り続けています。走ると、気持ち良い汗で、硬くなった体はほぐれ、軽やかになります。おかげで、会社のシフト制の休日や有給休暇以外で、一度も体調不良で休んだことはありません。

今は、新型コロナウイルスの影響で、今まで想像がつかない出来事が毎日のようにテレビで放送されていて、恐怖と不安を感じていますが、きっと人類は新型コロナウイルスに勝つことができると思います。新型コロナウイルスが収束したら、堤崎部長と一緒に、焼津市のマラソン大会のハーフマラソンに参加すると約束しました。走ることは、体が鍛えられ健康になります。もっと大事なことは、どんな困難なことがあっても乗り越えられる、強い継続力や意志も鍛えられ、常に健康的な心でいられることだと思っています。』

◆受賞作文は「日本語作文コンクール優秀作品集」として、JITCOのホームページに掲載されます。

JITCOのホームページ→ <https://www.jitco.or.jp/>

メッセージ

(株)カヤ精密工業 総務部長 大石兆彦

遠く四川省から海を渡って来た日本でも、中国にいた時に始めた「走ること」を続けられることが、慣れない日本での生活の大きな支えとなっていると感じました。仕事ぶりは大変真面目で、ミスをした時でも素早く切り替えが出来るのも、同郷の実習生から親切で頭も良いと慕われるのも、走り続けているからだと思います。日本での限られた時間の中で、四季折々の風景を味わってください。そして、帰国し故郷の道を走る時には、すれ違う日本車のドアミラーには必ず目がいくことでしょう。

交 流 往 来

『世界緑茶コンテスト2020』、中国から29点出品

公益財団法人世界緑茶協会では、2007年からお茶の消費拡大を目的に、斬新でお茶の未来を感じさせる商品を評価するコンテストを開催しています。多様な茶商品を提案してもらうため、緑茶に限らず、紅茶や烏龍茶等も対象としていることから、毎年、世界各国から様々なお茶が集まります。14回目となる今年のコンテストは新型コロナウイルスの影響で出品への影響が心配されましたが、海外からも応募商品が無事に届き、日本（49点）、中国（29点）、台湾（11点）、韓国（5点）、ベトナム（2点）、タイ（1点）合計97点が集まりました。今年の応募商品を見ると、日本からの出品が約50%、中国からの出品が約30%、台湾からの出品が約11%を占め、ここ数年、中国や台湾でのコンテスト認知度も高まっています。

8月19日・20日に、コンテスト出品茶の審査会が行われました。審査基準は茶葉の内質（香気、滋味）、商品形態（コンセプト・ネーミング、パッケージデザイン、コストパフォーマンス）。審査会場にはそれぞれのパッケージと共に内質審査用の茶葉が並べられ、茶商工業者、試験研究機関、デザイン、マーケティングの専門家等8人の審査員によって、総合的な商品性が審査されました。

今年の入賞茶を見ると、「最高金賞」を受賞したお茶は15点、国別の内訳をみると、日本国内からの出品茶は4点、中国の安徽省や福建省等からの出品茶は7点、台湾からの出品茶は4点と、中国や台湾からの応募品が多数受賞しています。山岳民族をあしらったパッケージの商品や、茶葉と薔薇のつぼみをブレンドしたお茶、エコを意識しつつシンプルで美しいパッケージデザインの商品等、バラエティーに富んでいます。審査員から、「コンテストの回を重ねるごとに、パッケージデザインが洗練され、レベルが向上している」、「環境に配慮したパッケージや、商品開発に、耕作放棄地の再生等地域活性化を取り入れる等コンセプトが明確でメッセージ性のある商品があった」、「新たな販路開拓や、異業種とのコラボレーションが期待できる斬新な商品があり、コンテストの波及効果が期待される」等の講評がありました。



【審査会場】



【出品されたお茶】

世界緑茶コンテストの詳細情報は

世界緑茶協会HP 「O-CHANET」 ⇒ <http://o-cha.net/index.html> で見ることができます。

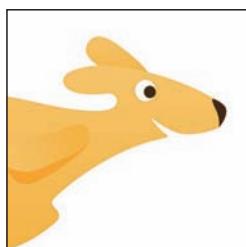
トレンドNOW（潮流奔騰）

「新小売」時代、デリバリーサービス

最近は、日本でも「Uber Eats」や「LINEデリマ」など、便利な出前アプリが使われるようになってきましたが、中国では数年前から、単なる弁当配達からフードデリバリーに各種機能の付加価値を付けた進化サービスが人気を博し、急成長しています。

利用者はアプリを立ち上げると、スマホのGPS機能により現在地から出前が可能な店とメニューが表示され、そこから、好きなジャンル、待ち時間、口コミなどを参考にメニューを決めると、スマホでそのまま決済を行うことができます。今年は、新型コロナウイルスの感染拡大でデリバリーの「非接触配送」は中国で爆発的に増加し、配達員が希望する利用者に対して、商品を手渡しではなく、会社の受付や部屋の玄関前など指定された場所に置き、利用者と配達員が接触せずに受け取れる方法の提供が開始されました。

美团外卖



「美团外卖」アプリは、中国国内のフードデリバリーサービスでは、シェア60%を占めNo.1と言われています。取扱商品は料理だけでなく、タピオカミルクティーといった飲料から、生鮮食品や薬品まで、幅広いジャンルに対応しています。アプリ内で出前を取りたい商品の注文・支払いができるほか、様々な商品を網羅的に検索できる点、配達員の状況から約何分後に到着する予定か確認できる点などが、魅力となっています。

餓了麼



「餓了麼」アプリは、アリババ傘下の中国最大手、外食デリバリーサービスアプリです。オンライン配達プラットフォームは、中国の670都市と1000以上の県をカバーしています。スマホの位置情報から、表示される出前可能なお店の中から料理をオーダーし、配送先を入力するだけで、どこへでもバイク便で届けてくれます。オンラインレストランは340万軒、ユーザーは2.6億人に達しています。

大衆点评



「大衆点评（みんなの口コミ）」アプリは、ユーザーが「大衆点评」にお店の評価を書き込む。イメージは日本の「食べログ」に近いものになりますが、「大衆点评」は飲食店だけではなく、小売店、ショッピングモール、ホテル、映画、美容室、交通など生活情報に関わる様々な店舗が登録されています。また、店舗情報や口コミ以外にも各種割引チケットや、ネット予約、デリバリーサービスなど様々なO2Oサービスを提供している。

寧波の院士林、銀杏

寧波大学外国語学院外籍教師
静岡県立大学グローバル地域センター客員講師
(静岡県日中友好協議会 交流推進員)

横井香織

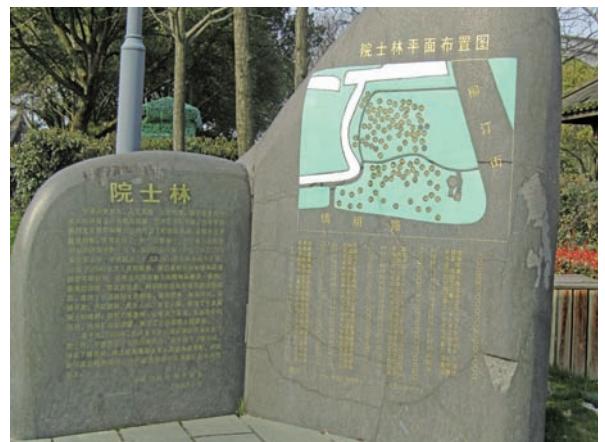


寧波の市街地には、緑豊かな三日月の形をした月湖と、その周囲に歴史的文化的な名所旧跡が点在する月湖公園があります。月湖は唐の時代に整備された人造湖で、宋元年間に月湖十洲や月島、芙蓉洲などの中州が造られ、月湖沿いに閔帝廟、清真寺をはじめ茶文化博物館や移築された蔣宅、林宅などがあります。四季折々の月湖の美しい姿は、一年が365日あるなら、365の風景があると言われています。休日になると、観光客はもちろん、子ども連れや老夫婦などが訪れ、寧波市民の憩いの場になっています。この月湖公園が、今回の舞台です。

寧波は、多くのビジネスの成功者の出身地として、世界に名を知られています。それだけでなく、実は多くの科学者を輩出してきた地でもあります。その代表は、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞した屠呦呦（とゆうゆう）氏です。彼女は、寧波に生まれ中国本土で教育を受け、かつ研究を続けた生粋の中国人として、初めてノーベル賞を受賞しました。マラリア治療薬研究の世界的権威です。

月湖公園には、寧波出身の科学者を称えるスポットがあります。「院士林」です。院士というのは、中国の科学技術分野の最高研究機関である中国科学院と中国工程院が付与する終身の称号です。1999年9月、寧波市政府は、寧波出身の院士86名を寧波に招待しました。会合の後、月湖公園の一角で、院士が一人一本の銀杏の木を植樹しました。こうして、86本の銀杏が植樹された寧波院士林が誕生しました。銀杏の林の前には、86名の院士の名前を刻んだ石碑が設置されています。その後、寧波籍の院士の人数は110名を超え、院士輩出都市のトップクラスに挙げられています。

毎年秋になると、銀杏の葉は黄色く色づきます。黄色は黄金色に限りなく近く、院士の功績を称えるという意味があります。中国の人々にとって、「色」は重要なことです。寧波市民は、この86本の銀杏の林で、家族や友人と深まる秋を感じ、楽しんでいます。地元の名士を樹木に結びつけて称賛するという発想は、日本にはないかもしれません。しかし、故郷を思う気持ちや四季折々の風景を楽しむ感性は、共通のものがあります。次の機会には、2005年に造られた寧波院士公園に出かけてみたいと思っています。



欧詩漫真珠博物院

南宋時代、葉金揚氏によって開発され、貝殻を用いた淡水真珠養殖技術は後に欧州、日本へと普及し、世界真珠養殖技術の発祥地は、浙江省徳清県といわれています。徳清県には、当地企業・浙江省欧詩漫集團が作った、世界最大級の真珠をテーマにした博物館「欧詩漫真珠博物院」があります。

西は国家景勝地・莫干山に臨み、東は国家湿地公園・下渚湖に接し、年間観光客の収容力は30万人、徳清県は真珠文化をテーマにした特色ある文化観光タウンを形成しています。



景色の美しい浙江省徳清は「世界真珠の源」であり、「淡水真珠伝統養殖と利用システム」は浙江省で唯一、中国の重要農業文化遺産に認定されている、歴史があり文化遺産のある町です。欧詩漫真珠小鎮は、欧詩漫真珠博物院、真珠研究院、真珠設計院、透明工場（スマートファクトリー）、文化回廊、欧詩漫真珠生態養殖基地などが観光スポットとなっています。

その中にある欧詩漫真珠博物院は、総建築面積6200平方㍍、総投資は6500万元。展示と研究、宣伝と娯楽、公共教育と文化交流を一体化した、世界最大の専門真珠博物院です。全部で、ホール、起源館、歴史館、文化館、科学普及館、企業館の六大核心展示館に分かれています。超広幅LEDスクリーンで真珠の歴史文化映像が上映され、中国現代の人工養殖真珠の発展史や、現代真珠の規模化養殖の創始者・欧詩漫集團会長の生涯などを、真珠に関する文献、資料、実物などが多く収蔵・展示されています。中でも目を引くのは、「欧詩漫真珠宝船」です。長さ6.19m、幅1.89m、高さ5.98m、総重量約2トン、船体には2,002,447粒の真珠が装飾されており、「真珠を象眼した一番多い彫刻」として、ギネス世界記録の称号を獲得しています。

作家が見た中国へタイムトリップ

司馬遼太郎、江南の旅

司馬遼太郎（1923～1996）といえば、国内を代表する歴史小説家として知られ、多くの歴史小説を書き残しています。司馬遼太郎は、幼いころ『左伝』や『史記』などをよく読み、『論語』も『孟子』も日本の古典として親しみ、中国や朝鮮の歴史にも造詣が深く、これらのアジアの国々をとても愛していました。中国の江南地方（長江下流の南側に広がる肥沃な地域）を訪れ、中国見聞録「街道をゆくシリーズの中国・江南のみち」を書いています。



司馬遼太郎が戦後はじめて中国を訪れたのは、当時、まだ文化大革命中の1975年です。西安・上海・北京を訪問団の一員として訪問した時の紀行記「長安から北京」を書いています。1981年に再び中国を訪れ、後に「街道をゆくシリーズの中国・江南のみち」を書いています。この時、訪れた場所は、蘇州の盤門、宝帶橋、杭州の岳飛廟、西湖、龍井、靈隱寺、塩官鎮、紹興の魯迅故居、禹陵、そして寧波では三江口、天童寺。江南地方を代表的都市を巡りながら、日本にとって「文明の灯台」だった中国について、考えを深めて、思いを馳せています。

杭州では、そこに都をおいた南宋と日本との関わりについて考えたり、龍井の茶畠を見て、中国茶の日本への影響について考えたりしています。司馬が訪れた岳王廟は、西湖蘇堤の北辺、北山路にある有名な旧跡で、南宋の武将・岳飛（1103～1142）が祀られています。「岳王」という王号は、岳飛の死後に贈られたもので、今でも漢民族の英雄として称えられています。また、西湖の白堤を見て、「湖畔に柳の植わった遊歩道があり、湖が美しい。花と水の公園に包まれた町だと聞いてきたが、なるほどそのようであった。」と称賛しています。

最後に訪れた寧波では、遣唐使や鎌倉時代の留学僧らが上陸した港や天童山を訪ねています。司馬が訪問した頃はまだ、「ジャンク船」という中国商人が利用した、三本マストで角形の帆が特徴の木造船も、多数運航していました。遣唐使から始まり、鎌倉・室町時代の貿易船は、主に寧波（唐・宋の時代は、“明州”と呼ばれていた）に着港しており、日本の歴史と極めて深い関係を持つ寧波を見ることは、司馬の願いでした。それが叶い、岸壁に立ったときの感激をこう伝えています。「河港の岸に立つと、血の騒ぎをおぼえざるを得ない。平安初期に入唐した最澄や空海もこの河港を知っていたし、鎌倉期には日本臨済宗の祖、栄西も私どもが立っている場所の土を踏んだ。」と悠久の歴史を心に刻みました。



【中国航洋ジャンク　寧波鳥船】